
うらら嬢の逡巡と決行

三条司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うらら嬢の逡巡と決行

【コード】

N0912J

【作者名】

三条司

【あらすじ】

「雨もしたたる良い河童」の番外編？です。本編が終わって直後の冬。

変態なのに乙女心をがっちりと掴んで離さない、美形河童の出島さんと、ツンデレなのに振り回されてばかりの不憫な女子高生、うらら嬢のクリスマスエピソード。

出島さんの変態っぷりに笑うもよし、うらら嬢のもどかしさに床を転がるもよし、ふたりのむずがゆい恋愛模様にもんどりうつもよし。

どちらが悪い子？（前書き）

お久しぶりです。

もうすぐクリスマスですね（唐突！）。

というわけで、クリスマスエピソードをお届けしたいと思います。

とかいって、宣言しちゃってから、クリスマスまで毎日更新出来なかつたらごめんなさい。

皆様の大好きな変態出島さんを、お楽しみください

脇役のみなさんにも、頑張っていたたく予定です。この脇役にスポットライトを！という熱いメッセージ、お待ちしております

どちらが悪い子？

自分の欠点なら、自分が一番よく分かっている。

だから、決めた。

だから、誰にも言っていないけど、恥ずかしくて誰にも言えないけど、あたしの心の中では決定事項。

その決断が下されたのは、もう数ヶ月前になるというのに、あたしは未だにそれを実行出来ないでいる。

それって、あたしだけのせいじゃないと思うの。それとも、そう思ってしまふあたしは、何かに理由をつけて、のらりくらりとその決定事項から逃げようとしているだけなのかな。でもそれだって、確かめようがない。

自分で決めたことなのに、相手がいないと実行出来ないなんて、なんて世の中不便なんだろう。ああ、違うか。不便なのは、人生。もっといっちゃえば、不便なのは、彼だわ。

「ただい……ひっ！」

ごくごく普通にただいまを言って、長かった学校からの道のりに疲れたあたしが玄関の扉を開いて、靴を脱いでからお母さんにあっ

たかいお茶でも入れてもらおうなんて、ごくごく普通の想像をしていた。ただいまも言い切れず、靴脱ぎ場と玄関の段差にだらりと片腕を垂らして転がっているそれは、ホラー映画の一シーンさながらで、あたしは悲鳴を上げた。

「何してるんですか。出島さん」

その生気のない顔を見て、あたしは少し落ち着きを取り戻す。何故って、それは出島さんだったから。

出島浩平、通称出島さんは、河童である。

ああ、そのこのひと、いきなりお茶を吹き出さないでください！それから、そのこのひと、あたしはいたってまともな神経の持ち主です！

異常に整った顔立ちで、異常にきれいな身体の持ち主で、黙って歩いていけばパリコレあたりからもお声がかかりそうな、問答無用に美形な出島さんは、しかして変態である。それはもう見事に、その容姿端麗さも木っ端微塵に吹っ飛ばくらいに変態である。河童である出島さんは、何の因果か、うちの実家である神社に祀られている龍神に用事があり、彼（そう、龍神は男性です）に会おうとした矢先に頭の皿が枯れかけて死にかけたらしい。そこへ、何も知らずにあたしがやってきて、神社の境内の掃除の最中に、ごみだの間違って箒で掃いたら、出島さんはどんぶらこっこと丘を転がっていき、着いた先が池だったらしく、出島さんの頭の皿の乾きはめでたく癒されることになった。だもんで、出島さんの脳みそでは、あたしは命の恩人ということになっていて、ストーリーよろしくあたしに『再会』する機会を虎視眈々と狙い続けていたら、まんまとそのチャンスがやってきて、あたしはあれよあれよというまに、出

島さんの魔の手に落ちた。

気付けば、出島さんはあたしの家に居候していて、気付けば、出島さんはあたしの中で大きな存在になり（といても、あんな変態、一度遭遇すれば忘れようがないと思うけど）、気付けば、出島さんはあたしの、あたしの、うう、言いたくないけど、あたしの恋人である。

ああ、あたしの人生ったら、何でこんなことになってしまったのかな！

出島さんてば、本気で気持ち悪いし、親父ギャグばかり言うし、フレンドリーなボデイタッチと称するセクハラは非道いし、河童だつていうせいで万年手の平が湿ってるし、あたしに近付いてくると決まって息が痴漢よろしく荒いし、リアクションがいちいち激しくて疲れるし、あたしの部屋に無断に入ってくるばかりか、勝手に寝顔を見てたり写真撮ったり目を覚ませば隣で添い寝ってたりするし、とにかく、出島さんの言動は何もかもが変態なのだ。

というわけで、玄関で死体ごっこをしながら他人に構ってもらうのを待ち構えていた出島さんを見て、あたしはいつものことかと、逆に落ち着きを取り戻すことが出来た。

あたしの問いにも無視を決め込む。面倒臭いなあ、もう。こちらでも無視をすることにして、玄関でローファーを脱いで、ちよっと考えてから出島さんの足の方から家にかかることにした。だって、顔の近くだと、手で捕らえられそうじゃない？

「隙ありっ！」

忍者みたいな台詞と共に、出島さんがゴキブリに酷似した動きで体を回転させ、あつという間に足があった位置に頭を持ってくると、あたしの足首をむんずと掴んだ。

「うわ、わっ！」

もちろん、こんな訳分からん行動に出られるとは思っていなかった。あたしは、バランスを崩して、膝を床で強打して四つん這いの姿勢になる。うう、痛い。でも良かった、壁の角で鼻をぶつけたりしなくて……。

「きゃー！ うららさん！ 大丈夫ですか、大丈夫ですか？ 今、膝がごぎゅり！と音を立てて床に当たりましたけど、大丈夫ですかっ！」

「誰のせいだと思ってるんですか！」

膝がじんじんと痺れるみたいにして痛い。痛みで、ちよつと涙目になりながら後ろでぎゃーぎゃー騒いでいる出島さんに向かって声を荒げると、なぜか、

「くわうっ！ な、なんですか、反則ですよ！」

と、更に訳の分からない応答をされる。

「うららさん！ そ、そんな格好で、制服に四つん這いなんて格好で、こちらを恨めしそうに振り返りつつ、その可憐な瞳に涙を浮かべて、唇を悔しそうに噛むなんて、反則です！ ぴぴーっ！ 即レッドカードものですよ、そんな惱殺ショット！」

「だからっ！ 誰のせいでこんな体勢になつてると思ってるんですかっ！」

「くふ、くふ、くふふふ。そうですねえ、そうですねえ、そうですねえ。僕ですよねえ、僕のせいですよねえ。だって僕とうららさんは星が定めた運命の恋人同士、天の川の氾濫さえ僕たちの愛を妨げる事は出来ず、その愛の深さは四次元ポケットをしても測りきれず、この愛で世界は平和になるところか、嫉妬で燃え尽きてしまつてしまうー!」

「世界を滅ぼしてどうするんですか、それから、星が定めたつて、どこの星？ 誰が定めたんですか」

「もちろん、出島星です」

「それって、変態ばかりが住んでる、地球の生き物全てが忌み嫌う星のことですか」

「やーだなあ、違いますよう。うららさんが大好きな僕が住んでいる、将来はうららさんの所有物になる星のことです」

「あたしの所有物になつたら、そんな星、真つ先に破壊してやります」

「うららさんたら、独占欲の塊さんなんですからあ」

「どこをどう曲解したらそうなるんですかっ!」

「ぐふふ、大丈夫ですよ。僕には全て分かっています。うららさんは、照れ屋さんで謙遜さんだから、出島星に遠慮しているのですよね。でも、ご心配なく! 出島星は、いえ、僕出島浩平は、すでに身も心もうららさんの所有物です」

「ちっか、よつて、こ、ない、で!」

明らかに不条理な論理展開を押しつけながら、出島さんがじりじりとタコのように口をすぼめてこちらに近寄ってくる。そのおでこを片手でカ一杯押し戻しながら、あたしは膝の調子をみていた。打った衝撃で痺れていたものの、大分収まったっぽい。片足に力を込めて立ち上がるのと同時に、出島さんのおでこを横に振り払った。途端、ぐき、と嫌な音を立てて、出島さんが崩れ落ちる。

「出島さん？」

無言。 無反応。 しかも、出島さんは微動だにしない。

……嘘！ あたしってばついに、首へし折っちゃった？ あたし程度の力なら、意外と筋肉ついてる出島さんには、目一杯やっても大丈夫かななんて、楽観的すぎた？ 首って、鍛えられないんだよね、あれ、それってアキレス腱だったっけ……。

ぐるぐると、不安があたしの脳みそを浸食していく。

「出島さん？」

二回目、声をかけてみたけど、やっぱり無反応。 心なしかぐつたりしている出島さんを見下ろしていたあたしは心配になり、つい出島さんの傍らに正座をした。

「隙ありっ！」

軽やかな声と共に、出島さんの頭があたしの膝の上に乗っかってる。 呆気にとられて言葉を返せずにはいたあたしを、出島さんは見上げると、その整った顔を完璧な笑顔へと変える。

「おかえりなさい、うららさん」

ああ、もつ。 出島さんて、何でこつ。

反則なのは、出島さんの方だわ。

聖夜は誰のため？

日常茶飯事になっていることが恐ろしいような出島さんとの出来事があったあと、あたしは何とか出島さんを振り切って、自室に逃げ込むことが出来た。うちは、典型的な和風の家なので、ドアなんて大層なものはなく、せいぜい襖を閉めるくらいのことしか出来ないんだけど、利点としては、襖を一度破いてお母さんに叱られたことのある出島さんは、それから襖にだけは乱暴をしなくなった。なので、一旦、出島さんの目の前で襖をぴしゃんと閉め切ってしまえば、出島さんはおのずとこちらに入ってきて来られなくなるというわけ。

「まったく……。出島さんてば、相変わらずなんだから」

出島さんのお仕事は、水棲種と猿人種の河童の橋渡しをすること。誰にも知られていないけれども、そして、誰にも知られていなくても一向に不思議ではないけれども、河童には二種類存在するらしい。ひとつは水棲種。こちらに、出島さんたちは属するらしい。水棲種は、龍神をボスとする水妖の一種。猿人種の場合は、同じ『河童』というカテゴリーにいるものの、ボスは山神である。そして、山神はもちろん、水妖ではない。というわけで、同じ妖怪のなかで、二つの種類が同時に存在することになり、これが水棲種と猿人種の仲違いを決定的にしていたそうだ。

長い間睨み合ってきた二種の確執に、龍神がピリオドを置くことと動いたのが数ヶ月前。彼の行動は無事認められ、かくして、水棲種と猿人種は、NSK（日本水妖協会）の傘下に置かれることになった。元々、NSKに組み込まれることをよしとしない猿人種はこれに反発、加えて、元々龍神に従ってきた水棲種の一部も、猿人

種と手を組むことに不満をぶつける者が現れた。　そういつひとちのところに行つて、説得したりするのが、今の出島さんのお仕事らしい。

いつも出張だらけで、殆ど家にいられない出島さんは、本当なら、こんなのがつく田舎じゃなくて、もっと交通の便の良いところに住むべきなんだけど、出島さんはああみえて頑固だから。　ここに住むって聞かなかつたのだ。

「久しぶりに会つたつていうのにさ……」

新学期が始まってからというものの、同じ屋根の下に住んでいるとは思えないほどに、あたしは出島さんに会えなくなっていた。　出島さんはそれを、

「たまにしか帰つて来ませんが、でも、だからこそ、たまに帰ってくる場所に、うららさんがいて下さるのは、何よりも嬉しいです」

と言つてくれたけれど。

でも、本当にそうなのかな。

会えなくなる期間が長くなればなるほど、あたしは、出島さんを遠く感じてしまう。　なのに、久しぶりに会つても、出島さんはいつもの出島さんで、あたしは戸惑つてしまう。　どう反応していいかわからないし、うまく笑えない。　出島さんの顔が直視出来ない。　出島さんが傍にいなければいけないで、もしかしたら、夏休みのことは、全部夢だったんじゃないかなって。　だって、どう考えても、妖怪が自己紹介しに来ると思わないし、河童があんな美形だなん

て信じ難いし、出島さんくらい変態なひとが存在するってのも眉唾もの。

久しぶりに会ったら、もっと、こう、穏やかに時間を過ごせたらなって思う。玄関で慕いごっことか、床で膝を強打するとか、夕コみたいなキスを迫られるとか、廊下を全力疾走して自室に逃げ切るとか、そういうんじゃないかって。もっと、穏やかに……。

「誰に久しぶりに会ったっていうんだよ、うららら」

そんな物思いに耽っていたから、背後からの声にあたしは肩を震わせた。

「おじいちゃん」

その声に聞き覚えがあることを思い出して胸を撫で下ろすあたしを、おじいちゃんは、低くからかうように笑う。

「よ」

極上の絹糸で刺繍が施された着物をだらしなく着て、おじいちゃんが片手を挙げてこちらに一歩足を踏み出した。

さらさらと流れる髪は、清廉な滝を彷彿とさせる。しどけなくはだけた胸元からみえるのは、透き通るような、というよりも、透き通っている真っ青の肌。中性的な顔立ちでありながら、男性的なその射貫くような視線。長く青い睫毛に縁取られた、切れ長な瞳は、底が見えない湖の色。もう何百年も生きているらしいのに、見た目は青年のようなおじいちゃんは、何を隠そう、うちの神社で祀られている龍神であり、出島さんの上司である。

「いつ来たの？」

「いつだったかな。 絹の顔が見たくなつてよ。 それで、ついでだから、うららの顔でも見てくかなとこつちに来たんだが、お前はまだ学校だったろう。 それで、まあ、しばらくすりゃあ帰ってきて来るだろつつんで、ここで寝つ転がってたらよ、いつの間にか寝ちまつてたみてえだな」

絹というのは、あたしのおばあちゃん、離れに住んでいる。

おばあちゃんは、れっきとした人間なんだけど、おじいちゃんがおばあちゃんに一目惚れして、おじいちゃんの世界に連れていかちやつたんだつて。 おばあちゃんは、おじいちゃんの世界では長生き出来ないから、というのでおばあちゃんはこちらに戻つて来ているけれど、おじいちゃんはちよくちよくおばあちゃんに会いに来ているみたい。

「それよりよ。 誰と久しぶりに会つたんだよ、お前」

「あ、出島さんが帰つてきて」

「かーつ、あのエロボケくそ河童がか！ あいつまた、お前に何か変なことしてねえだろうな？ いいか、うらら。 あいつが、お前のケツでも触ろうもんなら、首の骨をへし折つてやれ。 それから、俺様に報告しろ。 俺様が、灰になるまで焼き尽くしてやつからよ」

「う。 うん……」

ちよつと過激なおじいちゃんである。

「お、うらら！ お前に聞きてえことがあつたんだ」
「なに？」

学習机に備え付いている椅子の上に学校のカバンを置いて、あたしはおじいちゃんに笑顔を向けた。

「お前、くりすますっちゅうもんを知ってるか？」

「クリスマス？」

「おうよ」

「えっと、知ってると思うけど……。なんで？」

「なんかよ、くりすますには、好き合ってる奴らがちよちよくりあうっていうじゃねえか」

「ちよちよ……。それって、クリスマスイブのことなんじゃないかな」

「いぶ？ 誰だ、それ」

「クリスマスの前日のことをクリスマスイブって呼ぶの。元々は、西洋の宗教行事なんだけど、日本ではクリスマスイブは恋人の日って位置づけになっちゃってるみたい」

「ふーん」

つまらなさそうに言ってから、おじいちゃんは横目で壁にかかったカレンダーを見た。おじいちゃんのこの世のものとは思えない美貌は、乱暴な口調や乱雑な振る舞いで、何とかおじいちゃんを手の届く存在にしているんだと思う。だって、こっやって黙って虚空を見つめているおじいちゃんは、龍神であって、おじいちゃんではないみたいだから。

「うらららよう」

ガラスの悪い、それでいて甘えたような声音で、おじいちゃんがこちらを見ずに言った。

「くりすますいぶは、あのエロボケくそ河童と過ごすつもりなの

かよ」

「し、知らないよ！」

顔を赤くして答えれば、おじいちゃんはきりりとあたしに向き直る。

「お前は、誇り高き龍神の孫娘なんだぞ。　くりすますいぶなんてえ、腑抜けた行事に参加してんじゃねえぞ。　何が恋人たちの日だ！　くりすますいぶに出島の野郎が、うららの周りをちょこちょこしてやがったら、頭の皿を完全に乾かしてやつからな！」

徐々に熱さを増していくおじいちゃんは、それから、締め切られた襖にその鋭い目をやると、

「ちゃんと聞いてんだろつな、出島！」

「はい……」

と、半泣きの出島さんの声が、襖越しに聞こえてきたことは、言うまでもない。

お夕飯のあと、ちょっとしたおつかいを頼まれて、あたしは家を出た。　行き先は、クラスメイトで幼なじみの岡崎の家。

「あれ、黄本じゃん」

「よ」

先程のおじいちゃんよろしく、片手を挙げて挨拶をしたら、岡崎

がにかりと歯を見せた。

「あ、おふくろ?」

「うん、何か、お母さんがこっちに注文したとかって」

「分かった、伝えてくるよ。外寒かったら? 炬燵にでも入ってるよ、今、お茶持ってくつから」

「あ、ありがとう」

岡崎の気の利いた言葉に甘えて、あたしはいそいそと居間に置いてある炬燵の中に足を入れた。ちよつとの距離なのに、体はしっかり冷えているみたい。

「今持ってくるから、もうちょい待ってるってさ」

この寒い中、何故か薄手の長袖Tシャツに半パン、靴下なしという格好の岡崎は、寒がる素振りも見せずに、炬燵の上に湯気のたつ湯飲みを二つおいた。

「最近、どうよ?」

「うーん、まあまああってところかなあ。数学は相変わらずやばいし、生物も化学も訳分かんなくなってきたし。文化祭とか体育祭って、楽しいんだけど、準備とかで時間食うから大変だよ。ね。岡崎は?」

「うーん……」

岡崎は、その人の好きそうな顔を困ったというようにしかめて、ずずずとお茶をすすった。

「いや、おれが聞いてたのは、そういうことじゃないんだけど…」

…」

「？」

意味が分からなくて、あたしが首を傾げると、岡崎はじれったそうにあたしを伺い見てから、

「出島さん！ お前と、出島さん、最近どうなのって聞いたの」

「あ」

恥ずかしそうにしている岡崎に悪くて、わざわざ皆まで言わせてしまった自分が恥ずかしくて、質問の内容が答えにくくて、あたしはずずずとお茶をすすった。

「クリスマスイブ、どうしてんの？」

なんで、みんな同じことを聞くのかな。

あたしは誓ってキリスト教徒ではないし、従って、クリスマスを祝う理由も義務もない。なのに、いつの間にか、イブは恋人同士で過ごす聖なる日、なんてイメージがくっついてしまったせいで、みんながみんな、強迫観念に襲われたみたいにしてイブイブイブイブってぴーちくぱーちく煩いのだ。

出島さんのお仕事なんて、超がつくほど不定期だし、いつ帰ってくるのかも言わないし、聞いたって「分かりません」とかふざけた答えが返ってくるし、どこに出張に行ってるのかだって分からないし、そもそも本当に出張なのかどうかも分からないし、だったらあたし、何で出島さんのことを待ってたりするの？って不安になっちゃうし！

そんな出島さんと、イブの日を一緒に過ごすなんて夢見るほど、

あたしはナイーブじゃないはずだわ。

「知らない」

思ってたよりも、冷たい言い方になってしまったのかもしれない。岡崎は、ぼつが悪そうに、「一、二度軽く頷いて、

「まあな。イブと一緒に過ごさないといけないってわけじゃないしな。出島さん、忙しそうだし」

明るく言ってから、岡崎は、幾分か真面目な顔になってから湯飲みに目を落とした。

「でも、出島さんはさ、黄本と一緒にいたいと思ってると思うぜ？」

「知らない、そんなこと」

そう答えてしまったあたしの、何と進歩のないことが。

今日は何の日？

「うららちゃん」

女の人に慣れた声がしてあたしが振り返ると、そこには黒本賢介さんが立っていた。賢介さんは、出島さんと同じ水棲種の河童で、NSKでは情報部に所属しているらしい。出島さんに負けず劣らず、ものすごい見目麗しいひとで、女の子が大好きで、出島さんよりかは変態ではない。

「あ、お久しぶりです。賢介さん」

ペこりとお辞儀をすると、賢介さんはヘリンボーンのマフラーにくるまれた首を少しだけすくめて、

「元気？」

と笑う。

その、何もかも見透かしたような笑みに、あたしは何故だか嘘がつかない。

「まあまあです」

正直にそう答えれば、賢介さんは優しく吹き出してから、学校の近くの繁華街の方を指さした。

「急いでの？」

「いえ、ちょっと図書館で調べ物をしたかったただだし、もう用

事は終わったので、時間には追われてません」

「そう。じゃあ、あとで送ってくからさ。お茶でも付き合っ
てくれない？」

「あ、えっと……」

「おれとじゃ、嫌？」

「いえ、そういうわけではないですけど」

「学校のこに見られたら嫌だなんて思ってる？」

出島さんと付き合っているということは、一部の友達しか知らないことだけど、出島さんや賢介さんみたいな年上のひとと、二人きりでお茶をしているところを見られたら、変な噂をたてられるかもしれない。学校の皆が皆、嫌なひとだとは思いたくないけれど、残念ながら、皆が皆、善人なわけではないわけで、そのへん、バランスが難しい。

あたしが返事に窮していると、賢介さんは、困っているだろうあたしの顔を覗き込むと、とびきり魅力的な笑みを深めて、

「手を出したりしないからさ」

「あ、あったり前です！」

「そうそう、その意気。うららちゃんは、そうでなくっちゃさ」

ようやく、からかわれたことに気付いたあたしは、ばつが悪くな
って黙り込む。

「じゃあ、おれは、あの道を少し奥に入ったところで車のエンジ
ンにかけてるから。ちゃんと、家まで無事に送り届けてあげるから、
乗ってきなよ」

そう言うのと、さっさと賢介さんは歩き出してしまふ。この、さ

っぱり感というか、諦めの良さというか、引き際の良さみたいなものが、賢介さんの女の人の経験値の高さを物語っていると感じるあたりは、まだまだおこちゃまなのだろうか。

何はともあれ、先日、おじいちゃんと岡崎に言われたクリスマスイブの話に、割と精神を乱されていたあたしは、学校までの長い道のりで身体的にも疲れていたし、賢介さんのお誘いに乗ることにした。

イブ、ねえ。

岡崎の家から戻ってくると、出島さんが他人に感染しそうな暗い雰囲気醸し出して、玄関に体育座っていた。

いつも不思議に思うんだけど、出島さんって、あたしが帰ってくるって分かってから、急いでこの体勢に入るのかしら？ それとも、本当にずっとこうやって拗ねてたのかなあ？ あたしには、前者の気がしてならないんだけど。

「どうしたんですか、出島さん」

さっき、おじいちゃんにもちょっと苛められていたし、このまま無視するのも可哀想なので、仕方なくあたしは声をかけた。

「うららさん……。僕を嫌いにならないでくださいよ……」
「は？」

いつものことだけど、出島さんの話運びは唐突すぎて、あたしにはついていけない。

そんなあたしを置いてけぼりにして、出島さんは、うじうじと膝を抱え、めそめそと鼻を噉った。

「僕はね、うららさん……。キリスト教徒でも何でもありませんから、クリスマスだのイブだのつてのを祝う義務も義理も理由も責任もないんですよ。でもね、周りの風潮的に、イブは恋人たちの日ってことになってるじゃないですか。それでね、僕は思ったわけですよ。それって一石二鳥だな、と。この日に、うららさんといちゃこらついている姿を、考え得る限り可能な場所で見せびらかせば、世間に僕とうららさんが何人たりとも邪魔の出来ない完全無欠の恋人同士であることを証明出来るばかりか、そんじょそこらのくそカップルよりも遙かに、僕とうららさんの方が勝っていることを実感出来、尚かつ、僕はうららさんを合法的に独り占め出来るって寸法です。イブ万歳！とまで僕は思いましたよ。でもね、僕は甘かった……」

「えつと、出島さんのスピーチ、前半には理解を示せますが、一石二鳥の辺りから常軌を逸しているので、まったく理解出来ないどころか、同情も出来ません」

「イブに出張を命じられました。龍神さまから直々にです。有給取つてたのにも関わらずにです。しかも、海外にです！こんな不条理があつてなるものか！ノン！人生とはいつでも不平等ですね。嗚呼、可哀想な僕とうららさん！」

ノン！のところだけ、いやに外人臭く言う出島さんは、疑う余地もないくらいに気持ち悪い。

「あ、そうなんですか」

「えええええええええ！　そ、それだけですか！　うららさん！　イブですよ？　聖夜ですよ？　恋人たちの日ですよ？　合法的にいちやついても良い日ですよ？　キリストに悪いと思わないんですか？？？？」

「いや、キリストは、イブにいちやついてくれなんて、一言も言っていないと思いますけど」

「それはきつと、キリストが、うららさんみたいにキュートな照れ屋さんだったからですよ。　本当は、イブにめちやくちやいちやつきたかったのに、何の不幸があったか知りませんがそれが叶わなくて、だったら、他のひとにいちやついてもらおうかっていう、そういうにくい配慮だと思います。　そう思いませんか？」

「思いません。　ていうか、あたしは、出島さんの他宗教の無知さ加減に、どん引いてます」

「世界とは、自分の手で開拓するべきものなり！」
「言ってることが、最早意味不明です」

冷たくあしらうと、出島さんは、ふと我に返ったように、掲げていた拳を下げて、ついでに眉根も情けなく下げてから、

「イブ、うららさんと一緒にいたかったです。　ごめんなさい」
「出島さんのせいじゃないんだから、謝って貰わなくても結構ですよ」
「うららさん……」

公園に置き去りにされる子犬の声で、出島さんが吠くのを後ろにして、あたしはわざと顔を上げて廊下を歩き出した。

という出来事があったわけなんだけど、もちろん、あたしはこれを誰にも言えず。

だって、そうじゃない？

イブなんて関係ないわ、って態度を取っておいて、出島さんがイブにいないの、なんて言えば、否が応にもあたしは出島さんがイブにそばにいてくれることを期待してたのかもって思うじゃない？それに、もしかしたら、あたしの知らないところで、ものすつごく不意なんだけど、あたしはどこかでそれを望んでいたのかもしれないし。そういうのって、考え出すと、どつばに嵌っちゃうから出来るだけ考えないでいたいし、思い出したくないから、誰にも話したくない。

だったんだけど、賢介さんの話術はあたしの想像以上に巧みで、気付けば一連のことをすっかり話してしまっていた。

「で、どうなの？」

「な、なにがですか？」

「がっかりしてる？」

賢介さんは、こちらが答えにくい質問をするとき、わざと軽い口調で、それから目線をこちらに向けずに言う。

「がっかり……は、してないと思います」

「本当に？」

「はい。だって、別にあたし、イブに誰かと一緒にいたいなんて思ったことないですもん」

「そう。じゃあ、イブ以外の日は？」

「バレンタインとかがつてことですか？」

「ううん、そうじゃなくてさ。恋人関連のイベントじゃなくて、うららちゃんの毎日。いつもの、どこにでもある、ありふれた一日。そういう日の中で、浩平のことを思い出すことはある？」

「それは……」

「それが、たまたまイブの日だったら？」

「そ、それは、えっと……。不幸ですよ」

「不幸？ どうして？」

「だって、一緒にいられないから」

「浩平は、うららちゃんにとって、一緒にいられないひとなの？」

ああ、そうかもしれない。出島さんがいるだけで、あたしの毎日は色彩を増すみたいだけど、いつも一緒にいてくれるわけじゃないから。

だから、余計に恋しくなるだけなのかもしれない。手に入れないものだから。

もしかしたら、あたしが出島さんのことを好きなのかもしれない、なんていうのはただのまやかしのかも。手に入れないものをねだる子供のように、あたしは出島さんをそばに欲しいと願っているだけなのかもしれない。

そんなの、恋愛っていうのかな？

「手に入れないものを欲しいと思うのは、ただのわがままですよ」

質問にしては弱々しく、意見としても弱々しい調子であたしが言うと、賢介さんはバックミラーであたしに目配せをする。

「さあ、どうかな？　それが、簡単に分からないのが、恋愛の醍醐味だよ」

「でも、いつかは答えを見つけ出さないといけないでしょう？」

「そんなに急ぐことはないと思うけれど、そうだね。　答えが見つかるんなら、それにこしたことはないだろうね」

「でも……」

見つけようにも、相手が必要なのだ。　ひとりでは、見つけられない。　どれだけ、あたしがその答えを欲しても。　本当。　人生って不条理で不平等だわ。

「でも？」

「いえ、何でもないです」

賢介さんを安心させるようにバックミラーに向かって微笑んでから、あたしは窓の外を見た。

出島さん。今日、イブなんだよ？

どちらが善い子？

賢介さんに家まで送ってもらっても、出島さんは帰っていなかったし、お夕飯の時間になってもまだ帰って来なくて、お風呂に入っても宿題を片付けても、布団の中で本を読んでも、やっぱり出島さんは帰って来なかった。

何を期待してるんだろう、あたし。

出島さんは、イブの日に出張が入ったって言っていたのに。しかも、どこだかは知らないけど、海外だとも言っていたのに。

でも、どうしてかな。出島さんなら、帰って来てくれるんじゃないかなって思ってしまった。もしかしたら、もしかしたら、不可能に近いようなことでも、もしかしたら、出島さんなら可能にしちゃうんじゃないかなって。

あたし、出島さんに期待し過ぎているのかもしれない。それって、迷惑だよな。出島さんに比べれば、あたしは全然子供で、恋愛が何なのか全く分かっていなくて、自分の気持ちに素直にもなれなくて。久しぶりに会っても、どうやって接して良いか分からなくて、戸惑うばかりで喜ばなくて、冷たいことばかり言ったりして、きつと、お仕事で疲れているだろう出島さんは、表面上よりもずっと悲しんでいるんじゃないだろうか。ああ、あたしって何でこうなの？ どうして、簡単なことが出来ないんだろう。決めたのに。決行する機会が少ないなら尚更、その少ない機会でも実行しないといけないって分かっているのに。あたしの頭は、理解していても、決断しても、行動には移してくれないみたい。

イブの夜は、全然寝付けなかった。両親は、よかれと思ってプレゼントをサンタさんからよ、なんてたすくの部屋に置いていくもんだから、妖怪は信じているくせに、サンタクロースは信じていない弟のたすくは、サンタではないということを実証するために、家中から証拠品と思われるものを集めるのに必死になるのだ。そして、やつの走り回る音はともうるさい。

結局、たすくの足音で目を覚ましたあたしは、だるい体を引きずって洗面所へと顔を洗いに行った。

「うわ」

思わず声がこぼれるほど、鏡に映ったあたしの顔は非道いものだった。目の下の隈はくつきりと青黒く、眉根に寄せられた皺はまるで永久に彫られたように顔の真ん中に鎮座し、口唇はかさかさ、髪もぼさぼさ。

「最悪」

こんな最低最悪な顔を見られるんだったら、出島さんに会わなかったのは、不幸中の幸いだったのかもしれない。とさえ思えてくる。どんだけ追い詰められてるんだ、あたし。

「おはよう」

機嫌の悪さを隠そうともせずに、居間に入っていくと、興奮で頬を上気させたたすくが顔を上げた。

「お、姉ちゃん！ どしたの、めっちゃめっちゃ顔色悪いよ？ 何か道端で拾ったもの食べたの？」

「拾わない。食べない。そして、失礼」

「じゃーあれだろ、サンタからプレゼントもらえなかったんだろ、姉ちゃん意地悪で陰険で気分屋だから」

「あんたに言われたくない。ていうか、今何て言った？ サンタ？」

「うん。ほら、見てよこれ！ じゃん！」

効果音を自分で言ってから、たすくが手元に置いてあった分厚い辞書みたいな本を掲げる。きらびやかな黒地の装丁に、金色の文字が大きく光る。達筆な筆記体で書かれた本のタイトルは、『世界 妖怪図鑑』。あたしは、げんなりと思いい切り呆れた顔をしてみせてから、

「わーお。おめでと。たすくは、良い子にしてたからサンタさんからプレゼントもらえたのね。すごいすごい」

と、可能な限り棒読みで言っちゃった。

「おう！ 当たり前じゃん！ しかもこれ、一番新しい版なんだぜ。今まではさ、日本の妖怪図鑑ばかりで、世界の妖怪図鑑っていうのはなかったわけ。しかも、世界の妖怪図鑑っていうと必ず、日本の妖怪は軽視されてただけど、今回の図鑑からはきちり日本の妖怪も入ってるんだぜ。ほら、ぬらりひょんだろ、あかなめだろ、輸入道だろ、ほら、河童も！ しかもさ、しかもさ、ちゃんと猿人種と水棲種の違いまで説明してくれてんの。すごいだろー」

「すごい、すごい。全然羨ましくないけど、すごいすごい。それよりかさ、たすく」

たすくの向かい側に座って、二人で炬燵を囲む。あたしは、あ

くびをこらえながら、机の上に置いてある籠の中からみかんを取り出し、皮をむきながら、

「あんだ、サンタクロースなんていない、とか言ってたなかった？」

「いやー、それがさ。今年は、ちよつと事情が違うんだよね。」

庭にも、境内にも鹿みたいな足跡があるし、サンタのおっさんの髭みtainな白い毛が玄関に落ちてたし、図鑑についてたラッピングの紙も、いつもみたいにデパートのものとかじゃなくて、外国っぽいし。だから、もしかしたら、これまでのサンタのおっさんじゃなかったのかもしれないんだけど、今年は確実におっさんだと思う。

「おっさんって、あんだ……。 見てもいないのに、何でサンタはおっさんだと思うのよ。」

「だって、絵本の挿絵とかだと、いつもそうじゃん？」

たすくって、大人びたこと言ったりしてるけど、やっぱりまだまだ子供だわ。

「それよかさ、出島さん、災難だったよな」

「何が？」

急に話題が変わるもんだから、あたしは口に入れたみかんでむせそうになった。

「イブの日に出張なんてさ。 周りがお祭りムードのときに、自分だけ働かないといけないって、辛いと思わない？ しかも、あんな遠いところに」

「遠いところ？ たすく、出島さんの出張先がどこ知ってるの？」

「うん」

「なんで」

「何でって、そりゃあ、聞いたからに決まってるでしょ」

「あ、ああ、そう……」

「姉ちゃんってさあ、全然出島さんに質問とかしないよね。いっつも出島さんに何か聞かれるの待って、出島さんが自分のことを話すのを待って、それで、出島さんと付き合ってるって言えんの？」

何故だろう。正論が、家族や自分の近しい人からやってくると無性に腹が立つのは。たすくが言っていることは正しいと思いつつも、あたしは腹が立って仕方がなかった。むかつく！ 弟のくせに！ たすくのくせに！

「うるさいなあ」

「姉ちゃん、出島さんのこと大事にしてやんないから、サンタのおっさんからプレゼントもらえないんだよ」

「うるさい！」

ああ、もう、最悪の一日の始まりだわ。

「姉ちゃん。岡崎が来てるよ」

たすくは、あたしの真似をして岡崎のことを呼び捨てにする。年下で生意気なたすくに呼び捨てにされてもなお、怒らないでいられる岡崎はつくづく、心が広いんだろっうなあと思う。きつと、力

ルシウムの摂取量が違うんだわ、あたしとは。

冬は、日が暮れるのが早い。

そこまで遅くはない時間なのに、玄関から見える外の景色はすでに暗く、岡崎の顔は家の灯りに照らされて、いつも以上に健康優良児に見えた。

「どしたの？」

「うん」

言つて、岡崎はにこにここと相好を崩す。そのまま、何も言わな
いでいる岡崎をいぶかしげに見て、あたしは待ち切れずに、

「なに」

「ちよつとね。散歩、しない？」

「散歩？」

「そ。今日、そんなに寒くないから。お前、今日一日一歩も

外に出てないんだろ？」

「何で知ってるのよ、そんなこと」

「たすくくんから聞いたから」

「たすくのやつ」

「おれが聞いたんだよ」

「あつそ」

「聞けば、大抵のことは分かるもんだつて。イブ、どうだった
？」

「おかげさまで、最悪だったわ」

「それはそれは」

あたしの皮肉にも、まったく顔色を変えずに、岡崎は未だにこに
こしている。それから、あたしにコートを取ってくるように言う。

何であたしが岡崎と散歩に行かなくちゃいけないのか分からなかつたけれど、でもまあ、外に出ていないのも事実だし、誰かと世間話でもすれば気も紛れるかと思っただので、あたしは大人しく岡崎の提案に乗ることにした。

「黄本も難儀な性格だよなあ」

「なんでよ」

「そういうところが、さ」

「岡崎は、良い性格してるわよね。　たまに思うもの。　あたしが、岡崎の性格だったらなって」

ちょっとしたことでイライラしたり、ギリギリしたらいい、考えすぎでどつばに嵌る前に自分で気分転換をしたり、気の利いたことを言ったり出来たりしたら良いのに。

岡崎は、あたしの言葉にぷつと吹き出すと、両手を頭の後ろにやっつけて、

「いや？　そうだったら、出島さんは、泣き出すと思っつよ？」

「何で出島さんが泣くのよ」

「よく泣いてるじゃん、出島さん。　あ、違うか。　よく泣かされてるじゃん、出島さん、お前に」

「うるさいなあ」

「ははは」

目の前に冬の田んぼばかりが広がる、見事な田舎の田園風景の前に来ると、急に岡崎が立ち止った。　それから、ジャケットのポケットをがさがさとまさぐる。

「どうしたの？」

「やべえ、家の鍵落としてきたかも。……違う、黄本んちだ。黄本が玄関に来るのを待ってる間に、鍵を柵の上に置いたんだ。悪い、ちよつと走って取ってくるからさ、ここで待っててくれない？」

「いいよ、あたしも行くよ」

「いや、いいって。おれが走っていった方が早いし、言うほど歩いてないじゃん。じゃ、すぐ戻ってくるから」

有無を言わず、岡崎が走り去るのを見届けてから、ふうとため息をついて空を見上げた。さつきまで群青色をしていたはずの空は、暗い闇色と藍色の中間色になっていて、急にあたしは心細くなる。

そのときだった。

ぼつ、と蛍の光のようなものが見えたと思ったら、それは見る間に田んぼ全体に広がって、まるで光のカーペット。ちかちかと煌めく光もあれば、白っぽく光るものあったり、光のぼらつきが逆に、その幻想的な雰囲気を作り出す。

「すいじ……」

誰にともなくそう呟いたら、何故か返事が返ってきた。

「気に入っていただけましたか？」

「出島さん!？」

いつの間にそこにいたのか、あたしの背後に出島さんが立っていた。ダウンベストにフリースのパーカ、ジャージのズボンを長靴に入れた、ネオ農民ルックとも言うべき恰好で、出島さんが笑み

を深める。

「え、いつ、から……」

「思ったよりも、準備に手間がかかってしまいました」

「何の……？」

「これですよ」

言ってから、あたしに一步近づき、出島さんは両手で目の前に広がる光の田んぼを指した。

「これ、出島さんが？」

「ええ。もちろん、ひとりではちょーっと大変だったので、岡崎さんに助けてもらいました。それから、もちろん、この田んぼは僕のものではないので、田んぼのオーナーさんに許可も頂きましたよ？」

「何で……？」

「メリークリスマス！ だからです！」

どこぞのファーストフードのCMのように、不気味に明るく言い放って、出島さんはもう一步、あたしに近付いてきた。

「イブだけが、クリスマスじゃないでしょう？ 別にね、僕はイブなんてどうだっていいんですよ。でも、いつも出張ばかりでそばにいけない僕が、イブすらもそばにいらなかったら、うららさんが寂しがるかと思って、それで、イブと一緒に過ごしたかったです。でも、本音の本音を言えば、僕は、うららさんと過ごすことが出来るなら、その日がイベントデーですけどね」

言いながら、出島さんはそっとあたしの手を取った。ぬる、としているその手が、なんだか妙に懐かしい。

「一応、仕事自体は死ぬ気で終わらして、イブの夜にはこっちに帰って来てたんですけど、イブの日そのものは、うららさんと一緒に過ごせなかったわけですし、もしかしたら、うららさんは怒っていらっしやるかもしれないじゃないですか。だから、代わりというてはなんですが、クリスマスを、うららさんと過ごそうと思って」「それで、この田んぼを？」

「イルミネーションっていうのが、流行っているみたいでしたから、出張先では。あのきれいな光を、うららさんと一緒に見られなかったのは残念ですが、そんなことでへこたれる僕ではありません。ないなら、作ってしまえば良いんですよ」

何てことないように言うけれど、これだけの広さを光で埋め尽くす作業は、大変だったに違いない。

「もしかして、岡崎が散歩しようって言いに来たのは」

「ええ。僕が、岡崎さんに頼みました。だって、うららさんを驚かせたかったから。驚いてくれましたか？」

くりくりと輝く瞳で見つめられると、急にあたしは喋れなくなる。どころか、握られた手を振り切って、この場から走り去りたい衝動に駆られるのだ。

「うららさん？」

でも、そんなんじや駄目なんだ。だって、決めたもの。あたしの欠点なら、あたしが一番よく分かっている。そのままじゃ駄目だってことも分かっている。ここから変わっていきたくとも思っている。だから、決めた。だから。

ぐいと、出島さんの手を引っ張って、つま先立ちになると、そつと出島さんの頬に口唇を触れさせた。それから、全身の血管という血管が沸騰しそうになるのを感じつつも、やっとの思いで、あたしは出島さんの耳に囁く。

「ありがとうございます。出島さんが帰ってきてくれて、すごく嬉しい」

恋愛なんて、ただのまやかしかもしれない。あたしの気持ちなんて、微々たるものなのかもしれない。出島さんが、何であたしみたいなのを好きなのかもなんて、疑い始めたらきりがない。だったら、それを疑うんじゃなくて、もっと前に進んでいった方が良いかもしれない。出島さんは、いつもいつもそばにいるわけじゃないから、いられるわけじゃないから、いてくれる時間を、大事に使いたい。歩みの遅いあたしだけど、進歩の見えにくいあたしだけど、それでも、少しずつでも変わっていったらなと願うから。

もっと、素直になりたい。

「出島さん？」

達成感と恥ずかしさにまみれて、呼吸をするのも困難だったあたしは、ようやくと息を落ち着けてから、出島さんの異変に気付く。かちこーんと固まってしまった出島さんは、さながら蠟人形。

「で、出島さん？え、ちょっと、大丈夫ですか？出島さ……」

心配になって、肩に手を置こうとしたら、出島さんの瞳からぼろりと涙が零れ落ちた。出島さんは、よく嘘泣きはするものの、本当に泣いたところは見たことがなかったので、あたしはびっくりし

てしまつて、ますますかける言葉に困つてしまつ。

「なんて……」

ぼろぼろと涙を零しながら、出島さんがあたしに頬笑みかけた。

悲しそうにも見えるその頬笑みは、でも、これまで見たどの笑顔よりもはつとさせられるもので、あたしは出島さんの次の言葉を待った。

「なんて、僕は幸せ者なんでしょう」

それから、ぎゅうとあたしを抱き締める。

「こんなに素敵なお目に遭えるなら、クリスマスも捨てたものじゃないですね」

「そうですね」

ふふ、と笑い合えば、お互いの息が首元にかかつてくすぐつたい。

何かかもの答えを見つけたわけではないけれど、出島さんがいるこの時間を、楽しみたいと思えるのは、確実に進歩。それから、出島さんに抱き締められて、心があたたかくなるのは、きつと何かの答え。

ひとりじゃ実行出来ないっていうのも、いつかは、楽しめるようになるの良いな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0912j/>

うらら嬢の逡巡と決行

2010年10月9日00時40分発行